

2023年8月30日

## 2023年度 第34回 中唐文学会のお知らせ(第2号)

残暑厳しき折、会員の皆様にはお元気でお過ごしでしょうか。第34回中唐文学会大会を以下のように開催いたします。また ZOOM でのご参加も可能です。ふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。

**会場** 〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138  
大阪公立大学杉本キャンパス・本館地区 高原記念館一階（添付地図の 27）  
※二階に休憩室も用意します

**日程** 10月6日（金）

~~~~~  
13時00分 受付開始

13時30分 開会の挨拶

13時40分 研究発表

題目：「貞元年間の中和節詩会をめぐる考察」

発表者：李恒（神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程）

質疑応答（14時10分～14時20分）

14時20分 研究発表

題目：「盛唐の響き——張祜の詩における音楽」

発表者：劉孟磊（神戸大学大学院人文学研究科博士前期課程）

質疑応答（14時50分～15時）

\*休憩\*

15時10分 講演

題目：「白居易の閨怨詩—杜甫からの継承と発展」

発表者：下定雅弘（岡山大学名誉教授）

\*休憩\*

16時10分 講演

題目：「中唐の詩賦と韻書」

発表者：平田昌司（中国語学研究家）

\*休憩\*

総会（17時20分～17時40分）

※今年度は感染症防止のために、懇親会は無しとさせていただきます。  
ご了承下さいますようお願いいたします。

### お願いとお知らせ

同封の振込用紙から、会費のお振り込みと出欠席のご連絡をお願いします。

また、対面かオンラインのどちらかで参加なさる方は、下記の「申し込みフォーム」より申し込みをお願いいたします。オンラインの方にはのちほど、ZOOMのURLをお送りします。

※フォームは中唐文学会のブログにも掲載予定です。

<https://forms.office.com/r/CbLMTRY7Bq>



準備の都合上、会費振り込み及び参加のお申し込みは、

9月30日(日)までにお願いいたします。

▼本会は、会費の納付で会員資格継続の作業を進めます。  
振込用紙に金額をご記入の上、お振り込み下さいますようお願いいたします。

【振込先】 口座番号 00100-8-631654 口座名称 中唐文学会  
正会員 3,000 円、準会員 (会報不要の方) 1,000 円

学会出張等に必要書類がございましたら、高橋 (weilaigao@hotmail.com) までお知らせ下さい。

#### 会場 (大阪公立大学杉本キャンパス) へのアクセス

JR 阪和線「杉本町(大阪市立大学前)駅」下車、東口すぐ  
地下鉄御堂筋線「あびこ駅」下車、4号出口より南西へ徒歩約20分

高原記念館は、本館地区の正門を入ると、芝生の広場の右手にあります。

#### 研究発表要旨

「貞元年間の中和節詩会をめぐる考察」

李 恒

徳宗皇帝(在位 779~805)は即位当初、旧弊を一掃し、藩鎮討伐のための準備を進めていた。しかし、建中二年(781)以降も、騒乱状態が続いたため、貞元四年(788)には藩鎮の勢力を容認し、やっと安定に戻った。見逃せないのは、徳宗が柔軟な政策を用いたのと同時に、宮廷文学が盛んになったことである。とくに注目するのは毎年二月に開催された「中和節」であり、徳宗本人が設立し、貞元年間(8~805)に盛んであった。その日には恒例として御製が下賜され、官僚らが唱和した。本発表では「中和節」の背景を明らかにし、詩会そのものはどのような特徴があるか、憲宗朝の中央文学に影響を与えたのか、盛唐の詩会との関連はどうかについて議論したい。

「盛唐の響き——張祜の詩における音楽」

劉 孟磊

中晩唐の詩人である張祜は、数多くの音楽関係の詩を作った。本発表にて注目するのは張祜が音楽のイメージに、どのような感情を託し、どのように表現したかであり、天性の音声に対する愛着や、その独特の感性が窺われる。まず楽器のイメージについては、一番多く使われる笛の表現法を通して、李白との繋がりを探る。張祜がよく自分を李白にたとえるのは、同じような不遇の遭際のみならず、芸術的な追求でも共鳴する部分があるためだろう。

また張祜の音楽関係の作品には、玄宗朝に関わる内容が圧倒的に多い。特徴として挙げられるのは音楽によって現実の時空を超越し、具体的な盛唐の場面を再現することである。その臨場感に溢れる筆致は、あたかも作者自身が同時代の目撃者であるかのようであり、これによって強い懐古の情の表現が可能になっている。

### 講演要旨

「白居易の閨怨詩—杜甫からの継承と発展」

下定 雅弘

白居易はわかい時から老年に至るまで閨怨詩に強い関心を示している。閨怨詩は一般に虚構だが、白の閨怨詩には非虚構の作品、社会及び自己の現実と関わる作、あるいは寓意の作が多い。これと関連して楽府題の作品はごく僅かである。白詩中では非閨怨詩中の閨怨表現が重要な要素になっている。例えば、「上陽白髮人」「陵園妾」、また「長恨歌」「琵琶引」等。白居易のこの閨怨表現は杜甫が非閨怨詩中で閨怨表現を活用したことの継承である。ただし白詩の閨怨はしばしば白居易自身の悲哀と融合している。これは世界の文学において最も早く現れたジェンダーレスの文学と言えるのではないか。

「中唐の詩賦と韻書」

平田 昌司

南北朝末期を代表する『切韻』（601年）系韻書の枠組みは、いわば「歴史的仮名遣い」的に、近代まで律詩律賦の音韻・字体規範として君臨する。この『切韻』の正統性を疑い、音韻規範を唐代長安音に改めようとする開元天宝以来の試みは、大暦元和に勢いを拡大しかけたものの、「韻書の中世」を終わらせるに至らなかった。むしろ晩唐に向かって、詩格の細密化、進士科出題の複雑化などの齊梁志向が認められる。一方、注意すべきは「音は八代の衰を起」こした韓愈による『詩経』の古韻の再現の試みで、宋代にも深甚な影響を及ぼす。

（参考）日本中国語学会編『中国語学辞典』岩波書店、2022年。平山久雄《敦煌〈毛詩音〉音韻研究》好文出版、2018年。平田昌司《文化制度和汉语史》北京大学出版社、2016年。

中唐文学会ブログ (<http://zwt.seesaa.net/>)



### 各問い合わせ先

大会関連： 高橋未来 (weilaigao@hotmail.com)  
幹事(会報)： 加藤 聡  
幹事(会計・名簿管理)： 戸高留美子  
幹事(広報)： 長谷川真史

以上